



Title	日本語とロシア語における存在様態表現について
Author(s)	三好, マリア
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(三好マリア)	
論文題名	日本語とロシア語における存在様態表現について

論文内容の要旨

本研究は、日本語とロシア語における以下のような表現について分析を行うものである。

- (1) a. 脇着の前には、まだぼつんと血のしみがついている。
 b. 足を投げ出して椅子にぐったりとくずおれたマルコムの腹部には、鮮やかな真紅のしみがひろがっていた。
 c. 目回りや頬の上部などに小さなしみが散らばっていることが特徴。
- (2) a. На занавеске стояло округлое черно-зеленое пятно.
 に カーテン 立つ PST 丸みを帯びた 黒がかかった緑色の しみ
 「カーテンに、丸みを帯びた、黒がかかった緑色のしみが付いていた。」
- b. Зеленые и буро-кирпичные пятна крыши разбросаны
 緑色の および 褐色を帯びたレンガ色の しみ 屋根の 散らばる CVB
 беспорядочно, как в мозаике, и я сбиваюсь со счета...
 無秩序に モザイクのように そして 私 勘定を誤る
 「緑色や、褐色を帯びたレンガ色の屋根のしみがモザイクのように無秩序に散らばっていて、私は数えることに失敗してしまう。」
- c. Белое пятно медалью красовалось на черной груди.
 白い しみ 獲章のようだ 堂々と姿を見せる PST に 黒い 胸
 「黒い胸に白いしみが勲章のようだ堂々と姿を見せていた。」

(1)と(2)はいずれも、事物の存在を表す表現であるが、単に存在を表すのみならず、それがどのように存在するか、つまり、存在様態も同時に表現している点で、通常の存在表現（「ある／いる」を用いた表現）とは区別される。本研究では、このような表現を野村（2003）に倣い、「存在様態表現」と呼び、それらが場所（Ground）を表す要素を伴う場合に限定し、ロシア語と日本語におけるこれらの表現の特徴を記述的・理論的に考察することを目的としている。

先行研究として、日本語に関しては、まず、存在表現一般について扱った、久野（1973）、寺村（1982）、西山（1994）、金水（2006）を概観した。これらの研究は主に、「いる」と「ある」の区別、（様態を含まない）存在表現の分類といった論点が中心となっており、存在と同時に表される様態についてはほとんど言及されていない。次に、存在様態について初めて記述した野村（2003）をはじめとし、安・福嶋（2000）、福嶋（2004）そして江（2015）を取り上げた。日本語の存在様態に関する研究は、存在表現の研究に比べてかなり数が少ない。しかも、いずれの研究も、「動詞+テイル」「動詞+テアル」といった特定の形式に着目し、それらの意味的・統語的特徴について議論している点が共通している。

一方、ロシア語に関しては、機能文法の代表的な研究、Bondarko（1996）のほかに、同じく機能文法の枠組みでなされたShvedova（1989）を取り上げている。ロシア語学では、日本語学と違い、「存在様態」という言い方はなされていないものの、「A（存在主体）+r（空間的関係）+L（存在場所）」という場所を伴う存在を表す式が提案され、そこに「V」という所在を特徴付ける選択要素が加わることがあるとされている。この「V」こそが、野村（2003）の言う「存在様態性」であり、同時にShvedova（1989）の言う「特性」並びに「格付け」「評価」と関係していると考えられる。

ロシア語の場合、「存在」の意味分野について述べる際、動詞が議論の中心になる。例えば、機能文法では、存在動

詞と言うと、典型的な **быть** [byt'] 「ある／いる」のほかに、(3)a の **стоять** [stoját'] 「立つ」のような、三次元によるものの位置を表す位置動詞¹ (positional verbs), (3)b の **стоять** [visét'] のような、そのもの特有の存在の仕方を表すという「特殊存在動詞」 (specific existential verbs)，そして、(3)c の **возвышаться** [vozvyšát'sja] のような、ものの位置を表現的に表すという「表現的位置動詞」 (expressive positional verbs) が区別されている。

- (3) a. На столе стояла ваза.
 に テーブル 立つ PST 花瓶
 「テーブルに花瓶が置かれていた。」
- b. На стене висела картина.
 に 壁 立つ PST 絵画
 「壁に絵画が掛かっていた。」
- c. За лугом возвышались горы.
 の後ろ 野原 そびえる PST 山
 「野原の向こう側に山がそびえていた。」

さらに、動詞を中心に論じている Shvedova (1989)では、存在動詞の中に、(4)a の **бушевать** [buševát'] 「咲き乱れる」のような、「特性を有する存在を表す動詞」，(4)b の **развестись** [razvestís'] 「むやみに生える」のような、「評価を伴う存在を表す動詞」，および、(4)c の **цвести** [cvestí] 「咲く」 そうでない動詞が区別されている。

- (4) a. На клумбе бушевали цветы.
 に 花壇 咲き乱れる PST 花
 「花壇に花が咲き乱れていた。」
- b. На клумбе развелись сорняки.
 に 花壇 むやみに生える PST 雜草
 「花壇に雑草がむやみに生えてきていた。」
- c. На клумбе цвели цветы.
 に 花壇 咲く PST 花
 「花壇に花が咲いていた。」

さらに、類型論的観点から存在表現について研究した Levinson and Wilkins eds. (2006)も取り上げた。Levinson and Wilkins eds. (2006)は、系統的に多様な 12 の言語について、それらが空間に関する概念をどのように表すかを類型的に調査・分析した研究である。Levinson and Wilkins eds. (2006)では、位相 (topology)，移動 (motion)，参照フレーム (frames of reference) という 3 つの観点から分析がなされているが、存在様態については主に位相の分析の中で触れられている。位相の調査・分析では、様々な存在物 (Figure) と存在の場所 (Ground) を描画した絵が提示され、それについて英語の 'Where is X?' に当たる質問をそれぞれの言語の母語話者に行い、その回答がどのような言語形式を使ってなされるかを調査したものである。Levinson and Wilkins eds. (2006)は、このような回答に使われる言語形式は予想以上に多様であり、空間表現という同じ意味領域を表す場合であっても、言語ごとの変異がかなり大きいと報告している。しかし、大まかな傾向としては、Figure が Ground から自由であるか付着しているか、Figure が Ground を貫いているか、Figure が人の装飾品であるか、といった点で特に言語間の変異が大きいと述べている。

このように、日本語に関する先行研究は、特定の形式 (構文) に着目、存在表現と存在様態表現の微細な違いを明らかにすることに成功しているものの、うち存在様態を表す構文としてテイル構文のみに限定するため、実際にはテ

¹ Newman (2002)では「姿勢動詞」 (posture verbs) と呼ばれるもの

イル構文以外の構文を用いて存在様態が表せるパターンを見逃していることになる。そこで、意味的な側面（具体的に、存在様態性そのもの）に注目すれば、存在様態文（構文に拘らないということで、正確には「存在様態表現」と呼んだ方が妥当である）が全体としてどのような体系を成すのかを明らかにすると筆者は考えている。したがって、ロシア語に関する研究や類型論的研究から得られた知見を日本語の存在様態表現の分析に適用することによって、日本語の存在様態表現についてこれまで明らかにならなかった特徴を明らかにできることが期待される。

本研究では、このような考察に基づき、特にロシア語についてなされた分析方法を日本語の分析に応用することを試みる。具体的には、野村（2003）の挙げている存在様態表現の特徴—「A. アル・イルに置き換えて、文意が通ずる（自然な文になる）と言いにくい」「B. ニ格で場所が表わされる」「C. 動作・作用が現に行われた結果と言いにくい」「D. 動作本来の活動性が認められない」—および、福嶋（2004）により追加された特徴—「E. 語順が「～ニ～ガ～イル」であること」—に加えて、さらにもう一つの意味的な条件を設定する。それは「F. ものがどのように存在するかを表す意味要素が含まれている」という条件である。この「どのように存在するか」という要素を、Shvedova (1989) の言う「存在の特性」「存在に対する評価・格付け」と関連付け、Shvedova (1989) を分析の枠組みとしている。

本研究では、Shvedova (1989) で提案された「存在の特性」という意味的な観点から、野村（2003）等で扱われてきた日本語の存在様態表現の見直しを試みた。本研究では、「存在様態」を Shvedova (1989) の言う「存在の特性」より広い観点から規定し、特性を有するかいなかにかかわらず、野村（2003）および福嶋（2004）の挙げている条件（特徴さえ満たしていれば、いずれも存在様態と見なす。しかし、中には特性を有さない存在を表す存在様態表現（パターン 1, (5)を参照）と、特性を有する存在を表す存在様態表現を区別し、さらに、その特性の表し方によって、パターン 2a（動詞そのもので存在の特性を表す存在様態表現、(6)a を参照）と、パターン 2b（動詞以外の部分で存在の特性を表す存在様態表現、(6)b を参照）という二つの下位カテゴリーを区別した。

- (5) 古びた雑貨屋や肉屋、八百屋、終戦直後の闇市の名残のある集合市場…などが軒を並べる狭い筋が続き、傍らの路地に入りこむと、小さな町工場がぽつぽつと立ち並び、その裏方にドブ川が流れている。
- (6) a. 早速ですが、これがつきよの村の地形なんですね。川がくねくねしてて、ため池が 4 つあります。
b. 窓の向こうに、マラッカ川がくねくねと流れている。

1, 2 のいずれのパターンについても、両言語において存在様態を表すのに一般的とされる自動詞構文が対象であるが、存在様態性の観点から考えれば、自動詞構文のみならず、他動詞構文など、それ以外の構文を用いて存在様態を表すことができることが分かり、パターン 3 (7)を参照)とした。

- (7) いかにも涼しげな花々が屋敷を飾っていた。

このように、日本語の存在様態表現に関する研究が形式に焦点を置きながら論じているのに対し、ロシア語学（機能文法）ではより意味の側面に重点が置かれている。機能文法のこの特徴を用いて、ロシア語学の中で提唱された存在に対する見方を日本語の分析に応用することにより、日本語学でこれまで主流であった形式を中心とした議論を拡充し、より幅広い範囲の構文を存在様態表現のカテゴリーに取り入れることによって、これまで知られていなかった存在様態表現の様々な特質が明らかになるとともに、Levinson and Wilkins eds. (2006) や Lemmens (2005) らの類型論的一般化につながる道筋を示すことができた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

	氏名(三好マリア)	
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 教授	今井 忍
	副査 教授	林田 理恵
	副査 教授	岸田 泰浩
	副査 教授	岩井 康雄
	副査 教授	上原 順一

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語とロシア語における存在様態表現に関する対照研究である。本研究では、以下のような日本語とロシア語の文が存在様態表現と呼ばれている。

(1) 脣着の前には、まだぼつんと血のしみがついている。

(2) На занавеске стояло округлое черно-зеленое пятно.
に カーテン 立つ PST, IPFV 丸みを帯びた 黒がかかった緑色の しみ
「カーテンに、丸みを帯びた、黒がかかった緑色のしみが付いていた。」

これらの表現は、ある場所（以下、Gと呼ぶ）における、ある事物（以下、Fと呼ぶ）の存在や所在を表すとともに、それがどのように存在するか、すなわち存在の様態も同時に表す点が特徴的である。日本語にもロシア語にもこのような表現は存在するが、それらの性質には互いに異なる点があり、日本語母語話者のロシア語学習およびロシア語母語話者の日本語学習における問題、日本語とロシア語の間の翻訳における問題が生じる可能性がある。また、言語類型論における空間表現の研究 (Levinson and Wilkins 2006) においても、通常の存在表現と存在様態表現の使い分けが論点として取りあげられており、そのような点でも重要な表現であると言える。このような背景のもとに、日本語とロシア語の存在様態表現がどのような点で共通しており、どのような点で異なっているかを考察することで、言語教育、翻訳、言語類型論といった分野への貢献を目指すのが本研究の目的とされている。

本論文は4章から成り、第1章では、上記のような研究の背景と目的、存在様態表現の定義、および、その下位分類、さらに、本研究で使われる概念について述べられている。

第2章では、日本語とロシア語における存在表現と存在様態表現に関する先行研究が概観される。久野（1973）、寺村（1984）、西山（1994）、金水（2006）の研究は存在文を扱うものであり、FとGのどちらが新情報であるか旧情報であるかによって存在文の形式が異なること、場所表現を伴う存在文と伴わない存在文があること、指定文や所有文も存在文との共通性、空間的存在文と限量的存在文の区別、といった様々な観点から研究がなされているものの、存在様態表現には言及がなされていない。一方、野村（2003）、福嶋（2004）、江（2015）の研究においては存在様態表現が扱われ、野村（2003）による「アル・イルに置き換えて文意が通ずる（自然な文になる）と言いくらい」「二格で場所が表される」「動作・作用が現に行われた結果と言いくらい」「動作本来の活動性が認められない」という存在様態文の4つの特徴が示されている。福嶋（2004）は、野村（2003）の挙げた存在様態文の4つの特徴に加えて、「語順が「～ニ～ガ～テイル」である」という特徴もあることを指摘している。江（2015）は、野村（2003）や福嶋（2004）の分析をさらに発展させ、存在様態文がどのような状況を表すことができないかについて考察している。例えば「池に鯉が泳いでいる」は自然に受け入れられるが、「*山頂に後輩がうろついている」は容認されにくくと指摘し、これは「G=Fガ～テイル」構文においては、GはFが普通存在している場所でなければならぬという制約がかかっているためであると主張している。次に、ロシア語の存在表現の研究として、Bondarko (1996)とShvedova (1989)が挙げられている。これらの研究は、「機能文法」と呼ばれる枠組みにおける研究であり、形式ではなく意味を中心として文法の記述を行うのが特徴とされる。その代表的な研究であるBondarko (1996)は、「所在」という概念を提起し、それを「A+r+L」という式で表している。ここでは、Aは位置づける対象、Lはそれに対してAが位置づけられる対象、r

はAとLを結びつける空間関係を意味するが、さらにVという所在を特徴づける随意的要素が加わる場合があるとされている。本論文では、このVという要素を野村（2003）がいう「存在様態」であるとし、さらに、Shvedova (1989)の言う「特性」と関係していると述べている（Shvedova 1989については次の第3章において詳述されている）。さらに、言語類型論的な観点から存在表現を研究したものとしてLevinson and Wilkins (2006)が紹介されている。Levinson and Wilkins (2006)は、空間概念が様々な言語でどのような言語形式で表現されるかを実験的に調査・分析した研究であり、そこで扱われた3つの空間概念のうち、「位相」が存在様態表現に関連している。位相の分析では「Where is X?」に当たる質問をそれぞれの言語の母語話者を行い、その回答がどのような言語形式を使ってなされるかが調査される。Levinson and Wilkins (2006)は、この回答に使われる言語形式は非常に多様であり、言語ごとの変異が予想以上に大きいと述べている。しかし、大まかな傾向として「FがGから自由であるか」「FがGを貫いているか」「Fが人の装飾品であるか」といった点で特に言語間の変異が大きいと述べている。

これらの先行研究を踏まえて、第3章では、特にShvedova (1989)の「存在の特性」に基づく存在表現の分類の枠組みに基づき、ロシア語の用例と対照しながら日本語の存在様態表現の分析がなされている。従来の野村（2003）および福嶋（2004）の特徴づけに「ものがどのように存在するかを表す意味要素が含まれている」という特徴を加えることで、日本語の存在様態表現を「特性を有さない存在様態表現」（「家の裏にドブ川が流れている」）と「特性を有する存在様態表現」（「窓の向こうに、マラッカ川がくねくねと流れている」）とに分類している。この分析の過程で、ロシア語では動詞によって特性が表される場合が多いのに対し、日本語では動詞以外の要素で特性が表されることが多いという特徴があることが明らかにされている。さらに、Shvedova (1989)が挙げている「他動詞で表現される存在様態表現」が日本語にも存在すること（「花々が屋敷を飾っている」）も指摘している。

続いて、第4章では、これらの分析結果が従来の研究の流れにどのように関連づけられるかを考察している。Levinson and Wilkins (2006)では、口頭での応答による調査で存在を表す多様な形式があることが指摘されているが、Shvedova (1989)の枠組みを使った本研究の分析においても、やはりこれまでの日本語に関する研究では気づかれていたなかった多様な存在様態表現の形式が存在することが示唆された。また、Lemmens (2005)が行ったTalmy (2000)の移動動詞類型の存在動詞への応用に対しても、重要な示唆が与えられたとしている。すなわち、Talmy (2000)の類型では日本語は動詞枠づけ言語であり、ロシア語は衛星枠づけ言語であるが、第3章で明らかになったように、ロシア語では特性が動詞で表される傾向が強いのに対し、日本語では特性は動詞以外の要素で表される傾向が強いという事実は、Lemmens (2005)の予測を裏付けるものとされている。

これまでほとんど注目されることのなかった存在様態表現に関して、丹念に現象を掘り起こし、数多くの文献に当たりながら議論が組み立てられている点、また、この表現が、言語教育、翻訳といった実践的な分野から、機能文法や意味類型論といった理論的な分野まで、幅広い領域にわたる問題として説得的に提起されている点は、申請者の研究者としての優れたセンスと高い能力を如実に示している。申請者自身も指摘するように、これまでの日本語の存在文の研究が比較的定まった形式のみを扱ってきたのに対し、意味を中心に考察することによって多様な形式が存在の意味と結びついていることを示したこと、今後の存在文の研究の新たな方向性を示したものとして高く評価できる。その一方で、論全体の記述がやや散漫な点、日本語の用例がロシア語に比べてやや少なすぎる点が弱点と言えるが、新たな領野を開拓し分析の道筋を示したことを考慮すれば大きな問題とは言えず、むしろ、これらの点をカバーしていくことで、更なる新たな研究の発展が期待される。

以上の評価に基づき、本論文が博士（日本語・日本文化）を授与するに値する優れた研究であると判断し、審査担当者の全員一致により合格と判定した。